視的再生・再認に及ぼす進歩的・保守的語とその 価値の影響*

金 沢 大 学

北 野 榮 正**

I 問 題

或条件に於ては、過去の経験や動機は、知覚的な反応に重要な影響を与えるものと思われる(1, P. 271)。Bruner, J. S. や Goodman, C. C. は知覚現象に於て、刺激について個人が持つ要求 (need), 緊張 (tension), 価値 (value), 等が知覚的適応に重要な関連を持つとしている(2, P. 30~43)。

然し、過去の経験や動機等が知覚そのものではなくして、それに附随する判断や力動的な反応(例えば、言語)に影響するものと思われるのである。Pratt, C. C. の如きは「過去の経験は被験者の力動的な反応に影響し、その影響は被験者の感覚や知覚そのものについては否定的である」(3, P. 106)としている。即ち、知覚実験に於ては、実験的な場面と刺激を同一にしても、被験者の反応には差異のあることが考えられるのである。従つて、刺激的な条件とこれに対する反応との間には法則的な関係があるものと考えられるのである。

過去の経験や動機が知覚的な反応に重要な影響を及ぼす実験として、Postman, L. や Schneider, B. H. は語に対する使用の熟知的効果及び価値と視知覚反応との間に直接的な法則的な関係を結論している(4, P. 279)。実験刺激として、語を用いた場合、有意味な語に対する反応の一般的な所産であるところの変異は、これらの反応にもとずくところの知覚的な意味の所産でなければならない。或与えられた有意味な語についての知覚的な実験に於ては、その語の所与性と知覚的な意味の所産としての反応の個有性を分析する必要にせまられるのである。

例えば、或有意味な語を刺激として呈示し、被験者がこれを知覚してから、再生或いは再認するまでの差異が問題となつて来る。その1つの重要な問題に、語の働

きにもとずく知覚的な意味として、被験者が語を刺激として知覚し、その語を再生或いは再認するまでの持続時間の問題がある。Solomon, R. L. 及び Howes, D. H. はこれを視持続閾 (Visual duration threshold) と云っているのである(5, P. 257)。又、Postman, L., Bruner, J. S., McGinnies, E. 等は語を瞬間露出的に呈示して、再認を求めた結果、被験者の興味や価値の高い語は持続閾が低いと云っている(6)。更に、Vanderplas, J. M., Blake, R. R. 等も被験者に対して価値を持った語を聴覚を通して実験し、同様に、価値ある語に対しては再認に要する持続閾の低いことを報告している(7, P. 265)。或いは又、Howes, D. H., Solomon, R. L. は使用の頻数の多い語は再認に要する持続閾が低く、その相関は .68 から .75 の相関係数にあるとしている(8, P. 404)。それから又、Postman, L., Schneider, B. H. もよく使用される語の視持続閾は低く、而も、価値の高い語程低いと云っている(9, P. 279)。

以上の実験は、要するに、有意味な語を刺激として、知覚実験をなした場合、その差異は、刺激の個有性についての知覚的な反応の速さの差異に依存するものと思われるが、価値の効果と云うものは、被験者が語に対して持つ価値の優位性の態度に依るものと思われる。又、語は社会生活の所産であるとすれば、その使用の頻数及び価値の問題は、根本的には、社会意識に根ざした社会的態度の条件のもとに包括せしめられるのではないだろうか。それは、社会意識と云うものを社会的態度と刺激に対する反応との随伴に依つて規定される(10, P. 329)と考えるからである。そして、その社会的態度が有意味な語に対する知覚的反應に於て、その有効性を変化せしむる重要な要素となつているのである(11, P. 310)と思われるのである。

社会的意識としての個人の持つ社会的態度も、それが知的過程の機能であるから、行動に於けるその役割は、知的過程の性質に依つて決定されるものと思われる。そして個人は、刺激の持つ目標或いはその目標に達する過程に於て反応するものと思われるから、価値は刺激目標

*On the influences of radical and conservative words and their values upon the visual recall and recognition.

**Eimasa Kitano (Kanazawa University)

に達せられたものよりも、知的過程に於て構成され(12, P. 98), 個人の持つ全生活形式に滲透しているものと思われるのである。

従来、個人の持つ生活形式は種々に分類されているが、その主なものには、これを価値的に見た、Spranger, E. の6類型が挙げられる。The Allport-Vernon study of Values も Spranger, E. の6種の価値の分類を基礎として、理論的・経済的・政治的・審美的・宗教的・社会的に分類している。

社会生活に於ける、個人の態度と云うものは、断片的な社会生活を内的に関係づける傾向或いは傾性を云うのであつて、個人の生活類型について、内的に関係づけられる傾向は、人間の基本的な内包的な一般特性としての、進歩的傾向と保守的傾向であり、それは又、一連の人格的連続とも考えられるのである(13, P. 896)。勿論、個人に於ては、すべての生活類型について、進歩性或いは保守性が一貫しているとは考えられない(14, P. 111)が、個人が社会的態度として全生活類型に、一般的特性としての進歩性或いは保守性の人格的連続を縦として内包しているものと思われるのである。従つて、人間の連続的な傾性としての進歩性と保守性を縦とし、個人の生活領域に亘つた生活類型を横として、その縦と横の語に対する価値についての知覚実験をなすことに依つて、社会的態度としての刺激的条件と反応との間に法則的な関係を抽出する可能性を見出すのである。

II

実 験

目的 (1) 進歩的・保守的語及びその価値と再生時間との関係を求める。

(2) 進歩的・保守的語及びその価値と再認時間との関係を求める。

材料 生活の類型を理論的・経済的・政治的・審美的・宗教的・社会的の6種に分類し、大学学生54名について、各生活の類型(以下、類型と呼ぶ)毎に、進歩的語・保守的語(2字の単語)を蒐集せしめ、蒐集された進歩的語と保守的語とを各類型毎に各1組づつ関係語に連結せしめ、最後に、連結された語を類型毎に列位に於ける品等法に依つて評定せしめたのである。即ち、各類型毎に進歩的・保守的語各1組づつ連結された語に於ける列位を、そのまま点数とし、平均点の小さいもの、即ち、品等列位の上位のものから順に、3組づつ採用したのである。以上の手続を経て抽出した36箇の語の平均列位に於ける平均点は2.27となつている。

更に、これら36箇の語を進歩的語(18語)、保守的語

進歩的		保守的		進歩的		保守的	
理論的	実証	——	象徴	審美的	抽象	——	写実
	理性	——	感性		自由	——	流派
	創造	——	伝統		耽美	——	宗教
経済的	国営	——	民営	宗教的	異端	——	教権
	組合	——	財閥		救済	——	報恩
	自作	——	小作		自力	——	他力
政治的	選出	——	任命	社会的	人民	——	臣民
	管理	——	支配		友愛	——	慈愛
	採決	——	妥協		同志	——	主従

(18語)別に、列位に於ける品等法に依つて価値の評定をせしめた。即ち、最も価値ある語と思われるものから順に並べられた列位をそのまま点数とし、平均点の小さいもの、即ち、品等列位の上位のものから順次3語づつ1組として、6段階の価値列位(Value rank)としたのである。

手 続

Ranschburg の瞬間露出器を用いて、36箇の語を各類型毎に刺激として、1秒間づつ時間間隔5秒の割合で、刺激系列2回呈示し、呈示終了3分後再生せしめ、その後再認表を見せて、刺激語をその表の中から探し出させる(15, P. 1148)。再生、再認が完全に出来なければ、又呈示して、テストを繰返して行つたのである。

被験者 教育学部学生18名(男11名, 女7名)

日 時 1952年10月4日—11月20日

III

結 果

1) 進歩的・保守的語及びその価値と再生時間との関係

進歩的語と保守的語及びそれらの語の各 Value rank に於ける再生時間は如何なる結果になつているだろうか。Table 1 は進歩的、保守的語及びそれらの語の各 Value rank に於ける再生時間(sec.)の結果である。

即ち、進歩的語の再生時間の平均は9.50sec., 保守的語の再生時間の平均は11.00sec. であつて、進歩的語が保守的語よりも速く再生され、而も、これを各 Value rank 毎に比較した場合、Value rank 1 の進歩的語が8.40sec. に対して、保守的語が8.04sec. となつている以外は全 Value rank に亘つて進歩的語が保守的語よりも速く再生されているのである。

次に、再生時間を進歩的語、保守的語別に、夫々各 Value rank 相互に比較してみると、

先ず、進歩的語に於ては多少の変動(Value rank 2

Table 1

	Value rank						Means
	(High) 1	2	3	4	5	(Low) 6	
Radical words	8.40	7.68	9.42	8.64	11.04	11.82	9.50
Conservative words	8.04	8.88	10.38	12.48	13.38	12.84	11.00
Means	8.22	8.28	9.90	10.56	12.21	12.33	10.25

(7.68sec.) が Value rank 1 (8.40sec.) より速くなり、又、Value rank 4 (8.64sec.) が Value rank 3 (9.42 sec.) より速くなっている]はあるが、一般に、Value rank が低くなるにつれて、再生時間が遅くなる傾向にある。このことは又、Value rank と再生時間とに変動のあつた Value rank (2と1)と Value rank (4と3)との差を比較してみても、後者の方がより大きな変動となつている。従つて、進歩的語の各 Value rank を全体としてみた場合、一般的傾向としては、全 Value rank に於ける傾向として、Value rank が高くなるほど再生時間が速くなる傾向を示していると云わなければならないのである。

又、保守的語に於ても、Value rank 5 (13.38sec.) よりも Value rank 6 (12.84sec.) が速くなつているが、全 Value rank に亘る傾向としては、進歩的語と同

様に、Value rank が高くなる程再生時間が速くなる傾向にあると云わなければならない。

この傾向は、更に、各 Value rank に於ける進歩的語と保守的語の再生時間の平均をとつてみた場合、Fig. 1の如く、Value rank が高くなれば成程、再生時間が速くなつて居り、而も各 Value rank 間の再生時間の差は Value rank が高くなる程小さくなる傾向にある。従つて、進歩的語に於ても、保守的語に於ても、価値の高い語程速く再生されるものと云わなければならないのである。それから、進歩的語と保守的語について、各 Value rank に於ける再生時間の差異は Table 2 に於て見

Table 2 Analysis of Variance

Factors	S	f	s/f	F	Significant
Radical, Conservative words	6.8	1	6.8	6.67	*
Value rank	32.8	5	6.56	6.43	*
Error	5.1	5	1.02		
Total	44.7	11			

* 5 Percent level

る如く、進歩的語と保守的語に於ける相違とこれらについての各 Value rank の相違には5%以下の危険率で有意水準を認めなければならないのである。

(2) 進歩的・保守的語及びその価値と再認時間との関係

次に、進歩的語と保守的語及びこれらの語の各 Value rank に於ける再認時間(sec.) は次の如くなつている (Table 3)。

この結果から、進歩的語は保守的語よりも速く再認されている。即ち、進歩的語の平均再認時間は7.65sec.であり、保守的語の平均再認時間は8.02sec.となつている。而も、この関係は、Value rank 1の進歩的語・保守的語共に6.48sec. 以外は全 Value rank に亘つて、

Fig. 1

Table 3

	Value rank						Means
	(High) 1	2	3	4	5	(Low) 6	
Radical words	6.48	6.18	7.86	7.98	8.40	9.00	7.65
Conservative words	6.48	6.54	8.28	8.64	9.06	9.12	8.02
Means	6.48	6.36	8.07	8.31	8.73	9.06	7.84

進歩的語が保守的語よりも速く再認されているのである。

それから再認時間を進歩的語・保守的語別に、夫々各 Value rank 相互に比較してみると、先ず、進歩的語に於ては、Value rank 2 (6.18sec.) が Value rank 1 (6.48sec.) より速くなっているが、Value rank 全般に亘る傾向としては、Value rank が高くなるほど再認時間が速くなっているのである。次に、保守的語に於ては、全 Value rank に亘つて、価値の高い語ほど再認時間が速くなっているのである。

しかも、最後に、各 Value rank に於ける進歩的語と保守的語の再認時間の平均をとつてみた場合 Fig. 2 の

Fig. 2

如く、Value rank が高くなればなるほど再認時間が速くなり、しかも、各 Value rank 間の差は高い Value rank ほど小さくなる傾向にあるのである。従つて、進歩的語に於ても保守的語に於ても、Value rank が高くなるほど再認時間が速くなっていると云わなければならないのである。

これらの結果から、Postman, L., や Bruner, J.S.,

等の如く、価値の高い語程再認に要する時間が速くなると云うことが再確認されるのである。即ち、高い Value rank にある語程再認時間が速くなつて居り、この関係は、進歩的語の場合も、保守的語の場合も同様な傾向を示しているのである。この実験に於ける進歩的語と保守的語についての各 Value rank に於ける再認時間の差異は Table 4 に於て見る如く、語の相違は5%、Value rank の相違は1%以下の危険率で有意義であつて、進歩的語と保守的語に於ける相違とこれらについての各 Value rank の相違には再認時間は再生時間よりも有意義な差が認められると思われるのである。

Table 4 Analysis of Variance

Factors	S	f	s/f	F	Significant
Radical, Conservative words	0.4107	1	0.4107	11.09	*
Value rank	13.1883	5	2.63766	71.17	* *
Error	0.1851	5	0.03702		
Total	13.7841	11			

* 5 Percent level

** 1 Percent level

以上のように、同一な刺激語を用いて、再生実験と再認実験との結果を進歩的語及び保守的語それぞれについて各 Value rank 毎に比較してみると、再認時間の方が再生時間よりも速くなつて居り (16, P. 53), 更に、再認実験の方がより有意義な結果となつて居るのである。

IV

要約及び結論

(1) 個人の持つ社会的態度の基本的、包括的形式として、進歩的態度と保守的態度とを縦にとり、社会生活に於ける、個々の具体的生活形式として、6種の類型を横にとつた。これら縦と横との範囲から語(2字の単語)を蒐集せしめ、各類型毎に進歩的語と保守的語を関係語に連結せしめ、列位に於ける品等法に於て36箇の語を刺

戟語として抽出した。更に、36箇の語を進歩的語と保守的語別に価値品等列位に於て6段階の Value rank に分類したのである。

(2) 36箇の語を各類型別に再生及び再認実験を行った結果、

進歩的語は保守的語よりも、再生時間、再認時間共に速くなっている。

進歩的語及び保守的語夫々に於て、共に、価値の高い語程、速く再生され、速く再認されている。

各 Value rank に於ては、再認時間の方が再生時間よりも速くなっている。

(3) 進歩的語が保守的語よりも、再生時間及び再認時間に於て共に速いと云うことは、本実験が被験者として、青年学生を選んだ条件は認めなければならない。進歩的語が保守的語よりも再生時間に於ても、再認時間に於ても共に速く、又、進歩的語に於ても、保守的語に於ても価値のある語ほど再生時間、再認時間共に速いと云うことは、個人の持つ社会的態度と価値の優位性の態度が知覚的反応に於て重要な Factor として影響を持っているものと云わなければならないのである。

文 献

- 1) Postman, L., and Schneider, B. H. : Personal values, visual recognition, and recall. *Psychol. Rev.*, 1951, 58, 271—284.
- 2) Bruner, J. S., and Goodman, C. C. : Value and need as organizing factor in perception. *J. Abn. Soc. Psychol.*, 1947, 42, 23—44.
- 3) Pratt, C. C. : The role of past experience in visual perception. *J. Psychol.*, 1950, 30, 85—107.
- 4) Postman, L., and Schneider, B. H. : Perso-

nal values, visual recognition, and recall. *Psychol. Rev.*, 1951, 58, 271—284.

- 5) Solomon, R. L., and Howes, D. H. : Word frequency, personal values, and visual duration thresholds. *Psychol. Rev.*, 1951, 58, 256—270.
- 6) Postman, L., Bruner, J. S., and McGinnies, E. : Personal values selective factors in perception. *J. Abn. Soc. Psychol.*, 1948, 43, 142—155.
- 7) Vanderplas, J. M., and Blake, R. R. : Selective sensitization in auditory perception. *J. Personality*, 1949, 18, 252—266.
- 8) Howes, D. H., and Solomon, R. L. : Visual duration threshold as a function of a word-probability. *J. exp. Psychol.*, 1951, 41, 401—410.
- 9) Postman, L., and Schneider, B. H. : Personal values, visual recognition and recall. *Psychol. Rev.*, 1951, 58, 271—284.
- 10) Allport, F. H. : Social psychology. 1924, 321—335.
- 11) Bruner, J. S. : One kind of perception : A reply to Professor Luchins. *Psychol. Rev.*, 1951, 58, 306—312.
- 12) Woodruff, A. D. : The roles of value in human behavior. *J. Soc. Psychol.*, 1952, 36, 97—107.
- 13) Murphy, G., Murphy, L. B., and Newcomb, T. M. : Experimental social Psychology. (Rev. Ed.) 1937, 889—1046.
- 14) Kerr, W. A. : Untangling the liberalism-conservatism continuum. *J. Soc. Psychol.*, 1952, 35, 111—125.
- 15) 久保良英：実験心理学精義（複雑なる行動篇）。1927, 1147—1216.
- 16) 梅本堯夫：刺戟語と反応語の重みについて、心理学研究, 1951, 21, No. 3. 4, 46—55.

— 1954年8月29日受稿 —